
黒き心は闇を描く

わたぐも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒き心は闇を描く

【Nコード】

N 6 4 7 6 G

【作者名】

わたぐも

【あらすじ】

「未だかつてない新感覚爆笑ブラックギャグ学園小説！腹筋が痛くなる事、間違い無し！こんな展開…アリなのか！？」長きに渡り、魔王ブラッドが治めてきた世界”暗黒界”。ブラッドの側近をしていたソードは、いつもの日常が退屈であった…。ある時、ソードは超個人的な理由でとんでもない事を！？

黒き心は闇を描くゝ序章ゝ（前書き）

未だかつてない、異世界ギャグファンタジー学園小説です！

フツのファンタジー学園モノに飽きた方は、是非読んでみて下さい！

（序章は都合上、主人公が出ません）

（グロテスク表現を頻繁に使用します）

黒き心は闇を描く序章

魔王ブラッドが暗黒界を統一してから約一万年後：今でもブラッドは暗黒界最高の地位である魔王の座に君臨していた。

だが：当時の側近達は、謎の失踪を遂げたり、定年で退職届けを出したり、訳あって実家に帰ったりして、皆いなくなっていた。：ブラッドの側近であるソードを除いて。

ソードは何万年も長生きしている悪魔である。：そして極悪人である。

昔、重臣が皆いなくなった時、ソードは新しい重臣を城に招いた。：城に招いたのは良かったのだが、重臣は皆まともな心を持つ一般人だったのだ。

：重臣が皆一般人では面白いギャグが出来ない！ソードは新しい重臣達をつまらなく思ったのか、ブラッドの部屋にこもりつきりになり、そこでギャグをやる事にしたのだ。

今の時代となつては、ソードの存在を知る者は、ブラッドと当時の重臣達だけだ。

ブラッドの部屋は立ち入り禁止で、ブラッド以外入れなかったのだ。

：ちなみにブラッドの部屋には家財道具や電化製品が全て揃って

いて、甘いお菓子も沢山あるという噂が流れている。隠し部屋もあるとか…

ソードは、今ブラッドと一緒にその隠し部屋に来ていたのだった。

ブラッドの隠し部屋…そこは何もない畳六畳程の部屋だ。

ソードがブラッドをこの部屋に呼び寄せたのは、ある理由があったからだ。

「ソード…俺をこんな所に連れ出して何のつもりだ？」

「まあ…少しブラッド様に協力してほしい事があるんですよ…」

ソードはブラッドにニコリと微笑みかける。だが、ブラッドは逆に、その微笑みのせいで不安が増したのであった。

ソードとは一万年近く一緒にいた…だからブラッドは、ソードが何か変な事を自分にしようとしているのを、察知していたのだ。

…ブラッドの予感当たっていた。

ソードは最近暇過ぎて、何か昔の物語を越える、新しい物語が生まれないかどうかを思っていたのだ。

だが、自分とブラッドのギャグでは、”昔の物語そのもの”にな

ってしまつ。何か新しいギャグは無いのか…

そこでソードが思い付いたのが、”ブラッドを暗黒界から消す”
という事だった。

…さすがにブラッドのファンの方達や、ブラッドに同情して下さ
っている方達の為に、殺すという事だけは控えておきたかった。

…そこでソードが思い付いたのは……”ブラッドを異世界に転
送する”という事だった…

異世界に転送すれば、自分はブラッドを殺さなくて済む。新し
いメンバーも出来る。ブラッドには適当な時に暗黒界に帰って来て
もらえば良いだろう。

ソードは構想をした後、ブラッドに向き直った。

「ブラッド様…」

ソードの口角が上がった。それと同時に、ブラッドの緊張も高ま
り、ブラッドは唾をゴクリと飲んだ。

ソードはいきなり片手を上げたかと思うと、召還魔法を詠唱した。

「…この者を異世界に送りたまえ！」リリースデイル」！」

「は！？お前何す……………」

その言葉は最後まで聞こえずに、ブラッドは青い光に包まれて、消えて行った…

「ブラッド様… 良い旅を！」

ブラッドの後の事など考えずに、そう叫んだソードは、何を思ったのか、メモ用紙にある事を書き始めた。

” 城の家来達へ

俺はこの度、魔王をやめる事にした。

魔王がいなければ、暗黒界はまた戦乱の世となる…

俺の代わりになる新しい魔王を決めておいてくれ！

魔王ブラッド”

ソードはそんな手紙を書いた後、それをブラッドの部屋まで持って行き、ブラッドの机に貼り付けた。

その後、ソードはブラッドの部屋の窓から飛び降りた…

…ブラッドが異世界に転送された日から、今日でちょうど一年の歳月が経った。

ソードは、今暗黒界を旅していた。

もうそろそろ何かイベントがあつて良い筈だ。重臣達もあのメモを見て、慌てふためいているに違いない…

ソードが心の中で笑つて歩いていると、前方に巨大な建物が見えてきた。

「…何だコレ？」

ソードは不思議な気持ちになりながら、建物に近付いた。その建物には”暗黒学園”という立て札が付いてあつたのだ…

「暗黒学園なんて聞いた事無いけど…取りあえず入ってみるか。」

ソードは暗黒学園の門の近くに警備員がいない事を確認すると、そのまま門をヒョイツと飛び越えた。

女のような華奢な体をしているのだが、運動神経は良い方だ。いや…自分は”魔界最強の悪魔”って呼ばれてるな…

ソードはある理由から”魔界最強の悪魔”と謳われていたのだ。だが、暗黒界ではその事を知る者は少ない。それはソードにとっては好都合であつた。

ソードは門を飛び越えると、校内の茂みに隠れ、自身の姿と気配を消す魔法を唱えた。姿が見えるとマズい。

息を潜めると、ソードは校舎に入っていた…

校舎の中を静かに散策する。

散策すること約5分。会議室という部屋の前に着いた。電気はついてないな…

試しにドアに手をかける。てっきり鍵がかかっていたと思っていたのだが、ドアに鍵がかかっていないらしく、ガラツとした音が廊下に響き、ドアが開いた。

少し驚いたものの、周りに人がいない事を確認すると、ソードは会議室に入った。

ソードは会議室に入ると、ドアを閉めた。…怪しまれないように鍵はかけずに。

部屋の中央に大きな正方形の机があったので、そこに身を潜める事にした。

ここで身を隠していれば、この学園に関する事が聞き出せるかもしれない…

ソードは人の来訪を待った。

…しばらくすると、どこからかカツンカツンという靴音と、誰かの話し声が聞こえてきた。そこにいる奴らはざっと3人…くらいか。

ドアを開け放つ音が聞こえる。ソードは一層息を潜めた。

「ささっ、校長、教頭、椅子にお掛け下さい！」

青年の元気な声が聞こえた。ここにいる3人は、どうやら校長と教頭と新任教師という関係のようだ。

「いやー、校長！全く嫌になっちゃいますねー」

これは教頭の声か。

3人の会話を聞くため、ソードは逆三角形の耳をさらに尖らした。

「まさか、新しい魔王を決める為に、学園を作ってくれと言われるとは…。それに学園一の優等生を時期魔王にするなんて…」

…校長らしき人物が爆弾発言をした。”学園一の優等生を時期魔王にする”…

「極悪非道で傍若無人かつ、強くて指揮能力に優れた者を魔王に…こんな奴、暗黒界にはいないですよー。魔界にはいるかもしれないですけど…」

新任教師らしき奴がため息混じりに話した。悪い。俺その条件に目茶苦茶当てはまってる。

「でも入学希望者が沢山いたのには驚きましたね。”この学園で一番の優等生は魔王になれる”って魔王城の大臣様が言った瞬間、暗黒界の各地から生徒が集まって来ましたから…」

「僕、魔王の仕事は本当はツラいつて聞きましたよー」

教頭と新任教師がそう話した。確かにブラッド様は苦労していた。色んな意味で。

…ソードは3人の会話を静かに聞いていたのだが、机の下にあった、ある物を発見した瞬間、声を発してしまった。そのある物とは…

「…あ、チヨコ！」

チヨコレートなのであった…

「…あ、チヨコ！」

突然聞こえた声に、校長と教頭と新任教師は驚いた。その声は新任教師の机の下から聞こえていた…

新任教師が恐る恐る机の下を覗いてみると…そこには嬉しそうに笑顔でチヨコを頬張っている、見た目が13歳ぐらいの悪魔の少年がいた…

「……………！？」

訳が分からなかったのだが、新任教師は取りあえず、その悪魔の少年を机の下から引っ張り出した。

校長と教頭も、このハプニングに目を見張った。

「もしかして…不法侵入者！？まだ子供のようなだが…」

新任教師が顔を曇らせた。普通のソードなら、この場で3人全員の息の根を止めていたのだが、今自分は甘い物を食べているので、

普段と性格が大きく変わっていた。

ソードは新任教師の手を振り解くと、チョコを片手にこんな事を言った。

「…不法侵入者だ！？俺はただの甘党だ！校内で菓子を食って何が悪い！」

「いや、校内で菓子を食べてる時点で、悪い事してるよね君。」

新任教師は呆れ顔でツツコんだ。

ソードがまたボケをかまそうとすると…急に間に教頭がズカズカと割り込んできた。

そして…教頭はいきなりソードの片手を掴み、こう叫んだ。

「素晴らしい！」

…教頭の珍行動に、その場にいた教頭以外の全員が、目を丸くした。

「その全身から溢れる禍禍しきオーラ…君こそ悪魔の中の悪魔だ！」

教頭はそう言うと、視線を校長に移した。ソードもつられて校長を見た。

校長は…ハゲのオッサンだった。

校長はソードを見ると、何故か「ゴホン！」と咳払いをした。

「校長！この子をうちの学園の生徒にしましょう！必ず学園で成長して、良い魔王になる筈です！ね？君もそう思うだろ？」

「え…うん」

教頭に激しく迫られたので、ソードは何か何だか分からなかったが、一応返事だけしておいた。

教頭が興奮する中、校長は1人だけ冷静になっていた。

校長はソードを見ると、静かにこう言った。

「君の名前は…」

「…？ソードだけだ。」

「ソードか…。私は君を知っているよ…」

校長はそう言つと、煙草を取り出した。

このハゲのオッサンが自分の何を知っているのだろうか…

…校長は煙草を一服吸つと、こう叫んだ。

「我が学園への入学を許可する！」

終了・

黒き心は闇を描く第一章

暗黒界。

今ここに、その性格故に死神界から追放された死神の少女がいた。

名はヴェーレ。

…初めから死神界のような箱庭にいる気はさらさら無かった。ヴェーレは喜んで追放勧告を受けたのだが、暗黒界に着いた後、何をすれば良いのか分からなかった。

それは当然の事である。てつきり魔界のような知名度が高い世界に追放されると思っていたヴェーレは、見た事も聞いた事も無い暗黒界に追放されて、少し戸惑っていた。

まあ…行くあては無いのだが、取りあえず歩いて行けば良いだろう。

…そのヴェーレの考えは当たっていた。

目の前に人だけが見えたのである。

その先には

「暗黒学園」という立て札が着いた建物。きっと学園であろう。

咄然としてその学園を見ていたヴェーレに、1人の少年が話し掛けてきた。

「お前もこの学園の入学試験を受けるのか？」

そこには青い髪をした悪魔の少年がいた。見た目は自分と同じ、13歳程だ。

急に質問されたので、ヴェーレは答えられないでいた。

その様子を察知した少年は、静かにこう言った。

「…この学園の事を知らないのか。ここは”暗黒学園”。この学園で一番の優等生になった者は、数年後、暗黒界の魔王になれる…」

”この学園で一番の優等生になった者は暗黒界の魔王になれる”
…そのフレーズに、ヴェーレは強く惹かれた。

何せ自分の小さい頃の夢は、”魔王になって世界征服をする事”
だったからだ。

この学園に入れば、小さい頃の夢を叶えられるかもしれない…

「ん…？何か入る気満々みたいだな。俺は何かこの学園の教頭にスカウトされちゃってさ…別に入学試験を受けなくても良いって言われたけど、受けた方がスッキリするかな…」と思って。…じゃあ、俺はもう行く」

その少年はそう言い残すと、学園の中に入って行った。

この学園で優等生になれば、暗黒界の魔王になれるのか。…よし！決定だ！この学園に入る事にしよう！

ヴェーレは少年の後を追ひ、試験会場まで走って行った…

…ワクワクしながら試験会場に入った。どうやらこの学園は、面倒くさい入学手続きなどは、しなくても良いようだ。

面倒くさい手続きがないというのは非常に都合が良い。ヴェーレは…あまり賢くなかったからだ…

しばらく会場で待っていると、やがて試験官らしき魔族の女が会場に入って来た。

それまで騒がしかった会場のどよめきが、一瞬にして消え去った。

試験官は試験会場の奥にある、舞台に立った。

「この学園の入学試験内容は…」

ヴェーレはなるべく聞き漏らさないように、慎重に話を聞いた。

「強さを確かめる実力試験と…」

ヴェーレはそれを聞くと、静かに口角を上げた。強さには自信がある。今まで沢山の罪無き者を闇に葬ってきたからな…

ヴェーレは次の試験の内容も聞いた。

「心の黒さ、醜さを確かめる面接と…」

これもバッチリだ。自分は死神の中でも特にあくどい性格をしていると言われている。その性格のせいで、死神界を追放された程だ。

…だが、ヴェーレは最後に試験官が言った試験内容を聞き、絶望した。

「知力を確かめる筆記試験をやってもらう！合否は、これらの3つの試験を平均させた点数で決めるぞ！では、皆、次の第二試験会場に移れー！」

周りがもう大移動を始めているというのに、ヴェーレは立ち止まっていた。

知力試験…自分には絶対無理だ…勉強など生まれてこの方、一度もした事が無い…

ヴェーレが立ち止まっていると、誰かに肩を叩かれた。

…それは、さっき門で会った少年だった。

少年はヴェーレにピースすると、ニコリと微笑み、そのまま第二試験会場へと移っていった。

何なんだ…あの微笑みは…。一気に毒気を抜かれた気がした。それと同時に、何故か安心感が湧いてきた。

誰でも不安な時に微笑みかけられると、安心するのだろうか…

それにしても…門での時といい、今回といい、愛想の良さそうな少年だ。

あんな奴が本当にスカウトされたのか…？

…この時のヴェーレは勘違いをしていた。あの少年の”微笑み”の意味を理解していなかったのだ。

少年を知る者なら誰しもが震え上がる、あのどす黒い微笑みを…

第二試験会場に着いた。ここから先の試験は皆、この会場で行われるらしい。

気合いをいれていこう…

ヴェーレは深呼吸をすると、胸を張り、緊張しながら、第二試験会場の中に入っていた。

…ヴェーレは入学試験に合格する事は出来るのか…

…ヴェーレは全ての試験を終えた後、げっそりしてやつれていた。

実力試験や面接は楽勝だった…だが、筆記試験には頭を悩ませた…

”算用漢字が入っている四字熟語を3つ上げよ”…分かる訳無いだろう…自分は”四字熟語”という言葉の意味さえ分かってないのに…。

…ってか、”算用漢字”って、どんな凶器の名前デスカ？自分は機関銃とかマシンガンとかしか知らねーよ。

ヴェーレがそんな風に、心の中で変な葛藤を続けている中、ついに合格発表が貼り出されたようだ。

暗黒学園は合格者を”キヤル”と呼ばれる5つのクラスに分ける。キヤルはE〜Sまであり、Sに近付けば近付く程、優等生という事だ。

ヴェーレは、せめてキヤルがEでも良いからと、自分の名前を探し始めた。

ヴェーレ、ヴェーレ…。Eには…………自分の名前が無かった。

安心すると同時に、落ちたのではないかという、不安な気持ちも出て来た。

Dには…………あつた！合格者Dの所に”ヴェーレ”と書かれていた。

D…か。合格出来たのは嬉しいのだが、キヤルがDとは何か微妙な気持ちだ。

Sにはどんな奴がいるのか…

ヴェーレが合格者表を見ようとした瞬間、スグ近くでどつと歓声が湧いた。

「テスト全問正解の首席で、キヤルがSだつてよー！」

1人の少年が叫んだ。テスト全問正解の首席でキヤルがS!?

ヴェーレが見たその先には……あの時の髪が青い悪魔の少年がいた。

少年はヴェーレを見ると、今度はニタリと口角を上げて笑い、ヴェーレにこう言った。

「お前も合格したんだな……」

そう言うと、少年は人混みの中に消えて行った。

今回の微笑みは気持ちが悪かった……いや、怖いと言った方が良さだろうか。自分の全てを見透かされたような気がして、とても恐ろしかったのだ……

……見た目にそぐわず腹黒い少年だ。あの試験を”満点合格”したからな。

試験内容には実力試験と筆記試験のみならず、心の黒さを確かめ

る面接試験もある。

この面接試験さえも満点合格してみせたのだ。きっと、とんでもない極悪人に違いない…アイツにあったら、まずは警戒しよう…

だが、ヴェーレはこの先、さらに衝撃を受ける事となる…

…暗黒学園では入学試験が行われた後、スグに入学式があるらしい。何故そんなに入学式を急ぐ必要があるのだろうか…

…ヴェーレは疑問を持ちながら、体育館へと急いだ。

校長が話す長つたらしい話。それは暗黒学園でも同じであった。

「…で、あるからにして…」

ヴェーレや他の生徒達も、校長の話は聞いてなかった。よくある話だ。だが…

「次は新入生代表に出て来てもらっ」

校長がそう言った瞬間、皆の顔が凍りついた。あの少年はどんな風に出て来るのか…普通に出来て来てその場のテンションを下げるのか…はたまた突拍子に出て来るのか…皆、興味津々であった。

「新人生代表、入れ」

その言葉と共に舞台に出て来た少年は…何故か片手に業務用のクッキーを持ち、クッキーをむさぼりながら歩いてきた。

「んぐ…このクッキーウマイ。中々やるな…。これ、食い終わったから捨ててくれ！」

少年はマイクの前まで立つと、そう言って、若い魔族の教師に向かって、クッキーの包装袋を投げた。

どこの学園に、クッキー食いながら、新人生代表挨拶をする生徒がいるのだろうか…

少年は

「ゴホン！」と咳払いをした。そしてその後、訳の分からない事を言った。

「えーと…台本貸してくれないか？」

一気に周りがどよめいた。ヴェーレも、新入生代表挨拶で台本読もうとするなよ…と思っていた。

「…うるせえー！分からないモンは分からないだよ！何なら、テメーらが俺の代わりに、新入生代表の挨拶をやるか？台本無しで！」

すると、周りは不気味な程に静まり返った。そして、教師とおぼしき者が、その少年に静かにこう言った。

「アドリブで頼む…」

「アドリブ？はいはい。分かりましたー。」

アドリブをやると言う事で、少年はまたどんな衝撃的な発言をするのだろうか。

少年は二度目の咳払いをすると、語り始めた。

「ここの奴らとは初めましてだな。俺はこの学園の首席になったソードという。ちなみに甘い物が好きで、方向音痴なお茶目さんだ。…乾物が好きだと言う奴は表に出てこい。体を10個にバラしてやるからな！」

何かどうでも良い事まで言っていないか…名はソードというらしい。

「あ、彼女募集中じゃないから。」

じゃあ言っなよ。

「…取りあえず、本題に入るぞ。この学園は”次期魔王”を選出する為の学園だ。だからな…この学園に”弱者”は不要だ！…！」

いきなり物凄い事を言い出した。このソードという少年…ただ者ではないな。

新入生代表の挨拶の時点で、もう変人ゾーンに行っている…

「そこで…今から5分間、俺の目の前で殺し合いをしてもらう！先述の通り、この学園に弱者は不要だ！生き残った奴らだけが、この学園の正式な生徒だ！くれぐれも手加減したりするなよ？以上だ！」

ソードはそう言って、舞台裏に隠れた。

「ちよっ…さすがにそれはっ…」

あのクッキーの包装袋を投げつけられた教師が、ソードを止めようとしたのだが、それを教頭に阻止された。

「な…何と素晴らしい提案なんだ…！よし、君達！今から私がタイマーで5分計るから、殺し合いをしたまえ！」

この教頭も教頭だ。普通なら止めているだろう…。だが…ヴェーレは殺人が大好きなのであった…

「ペイルスト…」

ヴェーレがそう言うと、ヴェーレの手の中から、小さな鎌が付いた長い鎖が出てきた。

ヴェーレはその鎖を強く握り締めると、こう言った…

「俺を目の前にして、生きて帰れると思うなよ…」

…そこから壮絶な殺し合いが始まった。鮮血が飛び交い、断末魔の叫びが聞こえてくる。そこはまさに地獄と化していた。

ヴェーレはペイルストを振り回して、相手の首を斬っていく。

…ソードはその様子を饅頭を食べながら見ていた…

…ソードの舞台挨拶から約5分後。終わりの合図と共に、ヴェーレはペイルストを持つのをやめた。

周りを見渡せば死体だらけ。生徒の五分の一は死に絶えたようだ。しかも、全て自分が殺ったような気がする…

ソードはまたヴェーレを見てニタリと笑うと、マイクを持ってこう言った。

「各自、教師の指示でクラスに行け！」

教師の指示でクラス…？ヴェーレがその場にいると、あのクツキの包装袋を投げつけられた教師が、ヴェーレの首根っこを掴んだ。

「…ほら、君は私のクラスだぞ。私は新任教師のアレイヴと言う。…早くついて来なさい」

アレイヴは、まるで見下したかのようにそう言った。少しムカついたのだが、ヴェーレは我慢してアレイヴについて行く事にした。

…着いた先はA組。アレイヴによると、クラスはキャルに關係なく、適当に編成されているらしい。

…何かその運営の仕方はマズいと思うぞ。

ヴェーレは教室に入ると、空いている席に座った。隣は自分と同じ年ぐらいの魔族の少年だった。

魔族の少年はヴェーレからの視線に気付くと、体をヴェーレの方に向けた。

…穏やかそうな顔をしている。コイツは恐らく、筆記試験で良い成績を収めたのだろう。

先に言葉を発したのは少年の方だった。

「初めまして。僕はラスティと言います。暗黒学園には自分で入りましたからではなくて、両親に勝手に入学させられたんです。なので、まだ暗黒学園について何も知らなくて…」

両親に勝手に入学させられた…そんな奴もいるのか。

ラスティはため息を付くと、話を続けた。

「さっきの殺し合いだって…僕は防御魔法を駆使して、逃げ回ってましたよ…特に金髪ストレートで、ゴスロリの女の子が怖かった…って…あ！」

「金髪ストレートでゴスロリの女の子が怖かった」だと？」

金髪ストレートでゴスロリの女の子なんて、ヴェーレしかないなかった。

ヴェーレはラスティにジリジリと体を近付けて言った。

「言われた本人がどれだけ傷付くか分かっているのか…？」

「すいませ…って、あなた顔が笑ってるじゃないですか！逆に怖いです！やめて下さい！」

ヴェーレがラスティの首に手をかけようとした瞬間…

「コラー！早く全員席に着け！」

アレイヴが入って来た。

ラスティが安心し、ヴェーレが舌打ちをした。

アレイヴはヴェーレ達の事など気にせずに、神妙な顔で出席表を

見た。

「まだ…1人来てな…」

「おはよー!」

アレイヴの言葉を遮って入って来たのは、風船ガムを口にしたソードであった。

アレイヴはソードを見ると、呆れ顔でこう言った。

「お前…登場当初から現在に至るまで、ずっと菓子食ってるな…。いい加減にやめろよ…」

「悪いが、これは俺の生まれながらにした趣味だから、やめられないんだ。菓子を食う事は見逃してくれ。」

「見逃してくれと言われても…」

ソードはアレイヴのツツコミを綺麗に無視し、ヴェーレの後ろの席に座った。

…アレイヴは気を取り直すかのように、ヴェーレ達にこう言った。

「…今からお前達には3人ずつ平等に班分けをしてもらおう!」

「3人ずつ平等に殺し合い？」

「違う！班分けだ！」

アレイヴはそう言うと、どこからか箱を取り出した。

「班分けは…このくじ引きを引いて、同じ数字になった者同士が、同じ班だ！」

…ヴェーレは一体、誰と一緒にの班になるのか！？

終了・

黒き心は闇を描く第二章

早くくじ引きをやるのか…と思えば、アレイヴはくじ引き箱を教壇に置き、切なげな眼差しで、教室を見回した。

「…で、何で60人もいた筈の生徒が21人しかないんだ…」

教室の中は人数が少なく、ガラガラであった。

ヴェーレが何の気兼ねもなく、真っ直ぐ手を上げ、教室全体に響くようなハッキリした声でこう言った。

「ああ、ソイツらは全員俺が殺した。」

「クラスメートを殺すなよ…」

アレイヴは素っ気なく爆弾発言を言ったヴェーレから視線を変え、絶望的な顔でソードを見た。

「何で君はあんな事を言っただんだ…」

「だって楽しそうだし」

「楽しい訳ねーだろ！悲劇だろーが！」

教室は血の匂いで充満していた…

ソードはアレイヴのツツコミを無視すると、どこからかケーキの箱とフォークを取り出し、苺のショートケーキを食べ始めた。

授業中に堂々とショートケーキを食べるのはよくないと思う…

アレイヴはソードから視線を離し、再びくじ引き箱を持った。

「やり方は…さっき言った通りだ。席順に順番で取りに来い！」

ヴェーレは誰と班が同じになるのかを考えながら、順番を待った。

…そしてついにヴェーレの番に。

クラスが21人だから、班は7つ出来るのだろう。

ヴェーレはくじ引き箱から紙を取ると、紙の中身を見た。

…番号は3か。1が良かったな…

番号が書かれた紙を持って、しばらくボーっとしていると、ラス

ティに話しかけられた。

「あの…何番でした…？」

「3だ。」

「え…そんな…」

ラスティは気が遠くなり、一瞬倒れてしまいそうになった。

何故ならラスティの持っていた紙には…”3”と書かれていたのだ…

ヴェーレはラスティから、無理やり紙を奪い取った。

「お前も3か。という事は同じ班…。これから宜しくな。」

「いえ、出来れば宜しくしたくないです。」

ラスティがヴェーレに実直な感想を言っていると、フォークを口に挟んだソードが来て、ヴェーレの紙を見た。

「あ…お前らも3班？」

そう言って、ソードは紙の内側を見せた。そこには……” 3 ”とクッキリと書かれていた……

しばしの沈黙が続く。

その沈黙を打ち破るかのように、アレイヴが大声でこう言った。

「同じ班になった者とは、一年間一緒にいてもらおう！班は一年ごとの交代制だ！各自、指定された寮に行け！」

それを聞いて、ラスティは絶望した。

「い……一年間もこの人達と一緒に！？僕の命が持ちませんよ！」

すると、ヴェーレとソードが、ラスティに優しく微笑みかけた。

ラスティは命の危機を感じたのであった……

暗黒学園は全寮制。

ヴェーレ達は3班なので、第一寮舎の寮番号3の部屋に行かなければいけない。

何故、班が3班だから寮番号も3という、適当な決め方で分けるのだろう…

それと同時に、男女を同じ部屋に寝泊まりさせるのにも問題がある。

ヴェーレとソードは別にそんな事は気にしていないようだが、ラストイは”1つ屋根の下で女子と寝泊まりする”事に、変な緊張を抱いていた。

ラストイはヴェーレが女子だから、着替える時とかに見てはいけないから…という紳士的な考えもあったのだが、それ以上に、ヴェーレに変態と間違われて、殺される事の方が、よっぽど心配だった…

自分は生きて、この学園から出る事は出来るのであろうか…

可能性は…薄い。

つまり…死が間近に迫っていると…

ラストイは不安になって、同じ男子であるソードを見た。

ソードは…グルグルキャンディを幸せそうに舐めていた。

外観は子供だが、内面は精神的もう何もかもを知り尽くしている大人で、女子と寝る事ぐらい平気なのだろうか…

はたまた、まだ思春期を味わった事のない、純粋な子供だから、男子と女子の区別もつかないのか…。

いや、これまでの言動と行動から見ると、ソードは純粋な子供ではなく、黒い心を持った極悪人だな…

寮生活をする事を不安に思っているのは、どうやら自分だけらしい。すると、何だか気が楽になった。

寮番号3の部屋の前に着いた。ヴェーレが静かに鍵を開ける…

中は暗かったので、電気を付ける事にした。

…十八畳程の大きさの部屋に、2つの二段ベッドと1つの布団。部屋の奥には勉強机が3つ並んであり、部屋の中央にはテーブルとイスが置いてあった。

バスルームは…さすがに個室で仕切られていた。

「殺風景な部屋だなー…」

ソードがそう言って、テーブルのイスに腰掛けようとすると、いきなりテーブルの下から、悪魔のオッサンが出て来た。

「すまない！君がこの部屋を選ぶとは思っていない…」

「誰だー！？」

ヴェーレがオッサンを見て、後ろに引き下がった。

「な…私はこの学園の教頭だぞ！？生徒のクセにそんな口を聞くとは何たる…」

「いや、テーブルの下からいきなり現れられたら、誰でも驚くから…ってか、早く職員室に帰れ。」

ソードが教頭に対して、真顔でそう言った。

「いや…すまなかったな。つい興奮してしまっ…」

教頭は移動魔法を唱えると、どこかへ消えていった…

「何だアイツ…」

「俺の追っかけ兼ストーカーだよ。」

「何か事件でもあったんですか！？」

ソードはラスティのツツコミをワザと無視した後、キャラメルを舐めながら、こう言った。

「なあ…何か自己紹介とかしろよ。自己紹介をやったのは俺だけだぞ」

それはお前が勝手に、進入生代表挨拶で言ったからだろ…

ヴェーレとラスティは心の中でそう思ったが、あえて言わないでおいた。

「じゃあ、僕とヴェーレさんの自己紹介を…」

「俺の紹介だけやれば良いんだな。」

「え…」

ラスティは反論しようとしたのだが、ヴェーレに強く睨まれたので、渋々諦めた。

「俺の名前はヴェーレ。夢は魔王になる事だ。美少女で強い。俺が魔王になったら、暗黒界は必ず安定するだろう。」

「美少女は別に付けなくても良いんじゃないですか？」

「うるさい！美少女は一番強調すべき所だ！」

ヴェーレはそう言うと、顎に手を当てた。

「何故、俺のような美少女で強くて人望もあるという、完璧な死神がDな…」

「どこが完璧なんだよ。テメーは頭が悪い。」

ソードは強い口調でキツパリと、相手をワザと傷付ける為にそう言った。

実際、ヴェーレは強いショックを受けたのだ…

「頭が…悪い…」

「だったら、1+1を解いてみるよ。お前がこれが解けたら、今すぐSの座を譲ってやろう。」

…ソードは、普通の者にならスグに分かる問題を…それも、正解した褒美に、とんでもないものを付けた…

ヴェーレの顔が輝く。その場にいた誰しもが、Sの座がヴェーレに行き渡ると思ったのだが…

「…ところで、”1 + 1”って何の事だ？」

「……………」

「……………」

ソードとラスティが言葉を失ってしまった。ヴェーレは…”1 + 1”の意味さえ、分かっていたいなかったのである…

…ソードは啞然としているラスティを尻目に、ヴェーレに棒読みでこう言った。

「あなた頭おかしいんデスか？今すぐ精神科に診察しに行つて来いよ。」

「精神科とは…精神の科学の事か？」

ついには、言葉を間違えた意味で覚えてしまった。

恐らく、ヴェーレの知能は幼稚園児並だろう。

…不気味な程に静まり返った、寮番号3の部屋。この部屋にいる

者誰もが、沈黙を破らなかった。…彼女が来るまでは…

…ラスティは、いい加減この沈黙が、解かれてくれないかと思っていた。

その時だった…

ドアがカチャリと開く音がする。そう言えば、部屋の鍵を閉めていないような気がした。

そこには……くるくと巻いたピンクの長い髪で、頭に付けてある大きなリボンが目立つ7歳ぐらいの少女が立っていた。

少女は白い顔を赤くしながら、ドアノブを小さな手で持っていた。

ラスティが少女に何かを話しかけようとすると、少女は突然ソードを見て、さらに顔を赤くし、大声で叫んだ。

「きゃああああー！」

…そして、少女はソードに突進して行った。

ソードは突然の事態に目を丸くしていたものの、少女の突進をギリギリで避けた。

そのまま少女は壁に激突した。

「痛い…」

頭を痛そうに押さえる少女に、ラスティが手を差し伸べようとすると、少女はその手を素早く振り払い、またソードに突進しようとした。

「ソード先輩ー！大好きですうっうう！」

「俺は好きじゃないですうー」

そう言っ、ソードは自分の体ギリギリに当たりそうになった少女の頭を右手で驚掴みにすると、そのまま少女を床に叩きつけた。

…それと同時に床がメリツという悲鳴を上げた。

…ソードは床の音を聞くと、何事もなかったかのように、少女の頭から右手を離れた。

「ヒドいな…」

この行為には、ヴェーレも驚いていた。ラスティに至っては、今にも倒れそうな程だった。

…ソードが少女を床から引きずり出そうとすると、少女は自分で立ち上がった。

そして服に付いた木クズを払うと、チャンスとばかりにソードに抱き付いた。

「ソード先輩のそのドSな所が…大好きですっ!」

「お前…ドM…?」

ソードは自分がSだという事は自覚していたのだが、本当のMを見たのは、これが初めてであった…

いざ、目の前にすると気持ち悪い。

「私はソード先輩の噂を聞いて、天界からやって来た、天使のれもねーどと言います!」

「…え?レモンティー?柑橘茶葉?」

…明らかに後者の方は、れもねーどとは全く関係ない単語だ…

「レモンティーでも、柑橘茶葉でも、お好きなようにお呼び下さい!」

れもねーどのニックネームは自由に決めて良いらしい。

「じゃあ、れもん。」

ソードの付けたニックネームは、意外と可愛かった。ひらがなだが…

「素敵なニックネームありがとうございますっ！あ…後…良ければ俺の嫁””って言って、抱き寄せて下さい！」

「誰がやるかカスが。」

「きゃああああー！ソード先輩にけなされましたー！もう…幸せですっつううー！！！」

れもねーどは顔をリンゴのように赤くして、部屋から出て行った。

ヴェーレがポカンとした顔で、ソードにこう言った。

「お前…キヤルだけではなく、性格もSなんだな…」

「まあな。俺は生まれた時からサディストだ。」

終了
.

黒き心は闇を描く〜第三章〜

朝。

ラスティは8時に目を覚ました。

近くに置いてあった目覚まし時計に目を向ける。

「おはようござ…もう8時ですかっ!？」

…授業は8時30分から始まる。急いで用意しないと遅れてしま
うだろう…

慌てて、隣で寝ていたヴェーレを見る。

ヴェーレは……熟睡していた。

確か、昨日の夜はヴェーレが一番早く寝付いた筈…なのに何故…

……

「あ、起きた？」

ラスティがヴェーレを困った顔で見ていると、テーブルの方から
ソードの声がした。

ソードは…テーブルで、のんびりとホットケーキを食べていた…

「あ…何やってるんですかソードさん！ホットケーキなんか食べずに、起こして下さいよ！授業遅れちゃうじゃないですか！」

「朝食って大事だよな。」

「でも…」

「それに、自力で起きられなかったクセに、他人のせいにする誰かさんも悪いよな。」

「……………」

ラスティは言葉を失った。そんなラスティを無視して、ソードはヴェーレを見る。

「コイツも起きるの遅いなー。俺なんか睡眠時間10分しか取つてないのに。」

「…え！？」

「睡眠時間10分しか取ってないんですか！？健康に悪いですよ！」

「大丈夫。菓子食べて栄養取ってるから。」

「そついう問題じゃないです！」

いくら悪魔でも、昼寝を合わせて最低1時間は寝る筈だ。だが、ソードは…

ラスティが構想に走っている横で、ソードは現在爆睡中のヴェーレを起こそうとしていた。

「おい、起きろー!」

「……………」

「起きろー!…!」

「……………」

「…起きて下しやい…」

「……………」

「……………起きないとパズーカ砲で撃つぞ!」

だが…ヴェーレは起きなかった……………

「…よし!本当に撃ってやるからな!」

ソードは殺ると言ったら殺る男。男に二言は無い。

ソードはパズーカ砲を取り出すと、ヴェーレにそれを構えた。

「……………」

…ヴェーレはソードの声は聞こえなかったものの、そのドス黒い殺気を感じていた。

身が潰されそうな程の…

…パズーカ砲が撃たれようとしたその瞬間……………ヴェーレは反射的に、ベッドから飛び降りた。

……………もの凄い轟音が響き、さっきヴェーレがいたベッドは、跡形もなく破壊された…

パズーカ砲恐るべし…

ヴェーレは驚き、辺りを見回す。

跡形もなく無くなった自分のベッドに、恐怖で今にも死にそうな顔をしているラストイ。

その横には…ベッドのあった所に向けて、何故かパズーカ砲を構

えているソードがいた。

パズーカ砲の銃口からは、白い煙が立ち上っていた…

それに、ベッドのあった所の崩れた床に、巨大な鉛の弾丸が…

ヴェーレは頭が悪いながらも、この状況を理解した。

ソードが自分に向かってパズーカ砲を撃ち、自分がそれをギリギリで避けた事により、ベッドが破壊された。

そして、それを目の当たりにしたラスティはショックを受け…

ヴェーレは顔を赤くして、未だにパズーカ砲を構えているソードに近寄った。

そして一喝。

「俺を殺そうとするなああああ！！！」

ヴェーレは息切れする程の大声で叫んだ。

すると、ソードが真顔でパズーカ砲をしまった。

あんな巨大な凶器、どこから出し入れしているのであろうか…

ヴェーレは一瞬、恐怖を感じたが、まだ言うべき事があったので、ソードに向き直った。

…ソードは相変わらず、真顔で無言のままだ。

罪悪感なんて1つも持っていないだろう。

…真顔で無言の相手に叫ぶのは少し怖かったが、このまま放置しておくのも何なので、ヴェーレはまたソードにこう叫んだ。

「何で俺をパズーカ砲で撃ったんだ！」

「第三章が始まったばかりだし、少しブツ飛んでみよう」と…」

「ブツ飛びすぎだ！！！」

危うく、自分の命までもブツ飛んでしまう所だった…

顔を赤くして息切れ気味なヴェーレと、真顔でアンパンを食べているソード。

…そして今にも死にそうなラスティ。

誰かが、この状況をツツコまないと、物語は進まないだろう。

そこへ救世主が…

「……………」

カチャリと静かにドアが開く音がして、15歳ぐらいの悪魔の少年が、部屋に不法侵入をした。

そして、何の説明もなく、ヴェーレの前まで来ると、静かにこう言った。

「頭上の落下物に注意…」

「頭上の落下…物…？」

ヴェーレが訳が分からず立ち尽くしていると、急に上から黄金のタライが、ヴェーレの頭上目掛けて落ちてきた。

…ゴーンという音と、頭の鈍い痛みと…

「ブツ…ぶはははっ！ヴェーレさん！それ、傑作ですよ！」

大爆笑したラスティ。

…ヴェーレはラスティに殺意が湧いた。

それを知らないラスティは…

「クスツ…本当に笑えま…」

「横からの快進の一撃に注意。」

「え…？」

少年は、今度はラスティにそう言った。

その直後…ヴェーレの快進のパンチにより、ラスティの体は宙を舞った。

そして…ラスティは壁に叩き付けられ、約1000ダメージを受けた。

…ヴェーレは1.15という微妙な数値の経験値を経て、レベルが上がり、現在のレベルがこれまた微妙な数値の2.36になった。

ヴェーレは

「快進の一撃」を習得した。

そんな2人の横で………やっとアンパンを食べ終わったソードは、その謎の少年と話をしていた。

「お前、名前何て言うんだ……俺はソードだけど。」

「クラッシュ……」

名はクラッシュというらしい。

「……で、クラッシュ。さっきのタライは、どうやって落としたんだ？」

「僕はただ、予言をしたただだよ……。それより、急がないと授業に遅れるよ……？」

「あ……」

時計を見ると、もう8時20分であった。

もう一度クラッシュに話しかけようとする、いつの間にかクラッシュは消えていた……

……廊下を走りに走って、教室の前に着いた。

…中から話声が聞こえる。

今は授業中なのか…

ヴェーレが深呼吸をして、静かに扉を開けようとすると、ソードに肩を掴まれ、止められた。

「…待て、教室に入った時には言い訳を言っておいた方が良い。」

言い訳…中々、良い言い訳が思い付かない。

そうこうしている内に、ラスティが教室に入ってしまった。

それに気付き、ソードとヴェーレも教室に入る。

…教室に入ると、腕を組んだアレイヴが怒った顔で立っていた。

…まあ、当然と言えば当然であろう。

「何腕組んじゃないっでるんだよー。アレイヴのクセに生意気な…」

「腕を組んで悪いか！？しかも教師に向かって呼び捨てで呼ぶな！お前の方が100倍生意気だ！」

アレイヴがソードに向かって怒鳴った。

普通の視点から見れば、そう見えるだろう。

「あー…」

その場の空気を読めるラスティが、アレイヴに気を使って、小さな声で呼びかけた。

その声に、アレイヴが振り向く。

「な…何だい？」

アレイヴは必死にソードに対する怒りを抑え、笑顔でラスティにそう言った。

「アレイヴのクセして笑うなよー。」笑顔”って単語が可哀想ー。

「

「俺が笑って悪かったな！」

「あの…僕、泣いても良いですか…？」

その場に放置されていたラスティが小さく呟いた。

慌てて、アレイヴはラスティに向き直り、ニコリと笑った。

「最初は

「遅れてしまつて、すいません！」と言おうとしたんですけど…言う気無くしました。もう自分の席に座ります…」

「……………」

ラスティはスタスタと自分の席に戻っていった。

アレイヴはラスティに失望されたのだった…

「…もう良い。こうなったら、お前ら2人だけ遅れた理由を聞かせてもらっからな！勿論敬語で！」

ヴェーレは、ただ巻き込まれただけである。

「さあ、どちらから言…」

「はい」

ソードが手を上げ、棒読みでそう言った。

クラスの皆がソードに注目した。

「たまたま人身事故に遭遇してしまって、心に深い傷を負ったので、遅れちゃいましたー。」

「…バカな嘘を付くな！仮に人身事故にあつたとしても、お前なら逆に喜ぶだろ！」

「はーい。超喜びます。」

アレイヴがソードの頭を、教科書で叩いた。

「せんせえー、頭を叩かないで下さいー。脳内で細胞分裂が起こつちやいますー」

「いつそのこと、細胞分裂しまくって、まともで正常な脳になれ！このバカチンが！」

「まともで正常な脳になるべきなのは先生の方だと思いますー。このバカチンがー」

アレイヴは、さっきよりも激しく、ソードの頭を教科書で叩いた。

「わー、これは完全なる生徒虐待ですー。教育委員会に訴えてやるー」

「…もう好きにしろ」

ソードのあまりの真顔と棒読みっぷりに、アレイヴはついに諦めた。

「じゃあ、俺の好きなようにするなー」

元の口調に戻ってから、ソードの棒読みは消えていなかった。

…ソードが席に着くと、アレイヴはヴェーレを見た。

ヴェーレは唾を飲み込むと…こう言った。

「たまたまUFOに出くわし…」

「オイ！言っただったら、もっと面白い言い訳を言え！つまらないぞ！」

「ヴェーレに言い訳を言えと言ったのはお前かああああ！！！！」

アレイヴがソードに怒鳴った。

…果たして授業は無事に始まるのだろうか。

ソードとアレイヴを除いた誰もが、そう思っていた……

終了・

黒き心は闇を描く〜第四章〜

アレイヴは教卓に立ち、ため息ながらにこう言った。

「…ったく、今日は”課外授業”があるというのに…」

「課外授業？」

教室の皆が声を合わせた。

アレイヴはやっとまともな話が出るから嬉しいのか、少し口角を上げてこう言った。

「今日はな…皆の力を付ける為に、迷いの森へ課外授業に行ってもらう！」

教室がざわめいた。

迷いの森とは、暗黒学園から西の方向にある森の事で、道が曲がりくねっていて迷いやすく、行方不明者が多発している。

迷いの森には、行方不明者の死体が沢山転がっているという噂もある。

「…知っている奴もいると思うが、最近迷いの森の魔物達が凶暴化しているそう。その魔物達を狩ってほしい…」

そう言っアレイヴが話を続けようとすると、ソードが横から口を挟んだ。

「嫌だと言ったら？」

「嫌…って、課外授業は全員参加だからお前も参加しろ！」

アレイヴはソードに向かってそう言っ、気を取り直して話を続けた。

「言っおくが……迷いの森で魔物に殺されても知らないぞ？」

そう言っ、アレイヴはニッと笑った。

教室が再びざわめいた。

皆不安そっな顔で課外授業の話をしている。

……一部の者達を除いては。

ソードは未だに口角を上げているアレイヴに、真顔でこっ言った。

「それ、怖くないから。逆にシケる。」

「そんな事言うんだったらお前もやれ！」

「んー…分かった。」

ソードはアレイヴにニコリと微笑みかけた。

「寒気がする…」

「な？」

アレイヴはしばらく顔を青くしていたのだが、その場の状況に付き、バン！と教卓を強く手で叩いた。

「とにかく！今から課外授業に行くぞ！」

「えー、やだー。」

「ダダをこねるな！キヤルがSだったら、優等生らしく大人しくしておけ！」

「せんせえー、キヤルによる差別はいけないと思いますー」

「差別とこの話を結び付けるな！」

アレイヴはソードの手を無理やり掴んで引っ張り、他の生徒はそれに付いていった。

暗黒学園を出て早30分。

ヴェーレ達は、どんよりとした陰気な森の前に来ていた。

今にも幽霊やゾンビが出て来そうな雰囲気だ…

ヴェーレはその森を見て小さく呟いた。

「これが迷いの森か…」

すると、アレイヴが顔に冷や汗を流しながらこう言った。

「ど…どうだ！怖いだろ！も…もう怖じ気づいたのかっ…！？」

「怖じ気づいてるのはテメーの方だよ。」

ソードがアレイヴを見てそう言った。

アレイヴはハンカチで顔の汗を拭くと、今度は大声でこう叫んだ。

「今から狩りを始めろ！ペアで狩るか個人で狩るかは自由だ！では、行ってこい！！！」

アレイヴがそう叫ぶと、生徒達は四方に散って行った。

ヴェーレは1人で魔物を狩るつもりだったので、誰もいない道を選んだ。

…多くの生徒達が狩りに行く中、ソードとアレイヴだけがその場に残っていた。

「…なあ、アレイヴ。」

「な…何だ？」

「どうしてお前は狩りに行かないんだよ」

「ま…魔物が怖いから………って、お前もさっさと行け！」

ソードは

「はいはい」と言うと、森の奥に姿を消した。

…その頃、ヴェーレは迷いの森の奥でペイルストを構え、敵の出現を待っていた。

「……………」

静かに目を閉じて辺りの様子を感じ取る。

敵はどこにいるのか……………ん？北の方から何かの気配がする。

ヴェーレは神経をより一層鋭くさせ、ペイルストを強く握った。

どんどんその気配が近付いてくる。

「…来た！」

気配がすぐ側まで来ると、ヴェーレは目をカッと開き、ペイルストを振った。

その気配が何なのかも知らずに…

ペイルストは殺人能力が高い。鎌は小降りだが、人間の首なら簡単に切り落とせてしまえる。硬い皮膚を持つ、魔物の肌にさえ傷を付ける事が出来るのだ。

…だが、ペイルストの鎌はガキッという音を立て、空中で静止してしまった。

何があつたのかとペイルストの鎌の方を見ると、そこには片手でペイルストの鎌を掴んだソードがいた。

…よく見ると、手から赤い血が流れている。

ヴェーレは思わずペイルストを落とし、尻餅を付いてしまった。

そして、ソードを指差してこう言った。

「お…お前…何やってんだ！」

「それはどう見てもこっちのセリフだろ。お前こそ何やってるんだ」

「自分でも何をやっているのか分からなかった…」

「は…?」

今、普通の者ならば、ヴェーレが魔物と勘違いして、ソードに攻撃したと考えるだろう。

…だが、ヴェーレは頭が悪い為、その場の判断が出来なかったのであつた。

ソードはその事を察知したのか、ため息を付いてこう言った。

「…良いか？狩るのは”魔物”だけだぞ。俺を狩るな俺を。後、俺についてこい。お前だつたら魔物を狩るんじゃないくて、森林伐採しそうだ」

「森羅…万象？」

「どこからそんな言葉が出た。森しか合つてねーだろ。」

「森さん…？」

「…もう森さんでも林さんでも良いからついてこい」

ヴェーレはとにかくソードについて行く事にした。

その後大変な事になるとも知らずに…

迷いの森を2人で進んで行く。

ソードは変な道を選んで歩くので、ついて行くのがしんどかった。

今思えば…ついさっき、断崖絶壁を登っていたような気がしたのだが…

そして…断崖絶壁を登った後、南国の海の波打ち際で、ビーチバレーをしたような気もするのだが…

…明らかに断崖絶壁に着いた後スグに、南国の波打ち際まで瞬間移動するのはおかしいと思う。

それ以前に迷いの森を歩いていて、断崖絶壁を登るハメになるのはもっとおかしいと思う。

…だが、今は普通に迷いの森の道を歩いているし、ヴェーレの頭がヒドく悪かったので、ヴェーレはソードの方向音痴などは全く気にしなかった。

ただ、行く先々で景色がコロコロ変わるのだけは気になっていたようだ。

…ふと、ソードが足を止めた。

それにつられてヴェーレも足を止める。

ソードは一体どうしたのか…

ヴェーレはその事を疑問に思っていたのだが、少し時間が経つと、ソードが立ち止まった意味を理解した。

ヴェーレは頭は悪いのだが、野生の感は鋭いのである。

何故、ソードとヴェーレが立ち止まったのかと言うと………少し前方に魔物の群れがいたからだ…

普通の者なら恐れをなして逃げるのだが、ソードとヴェーレは逆に魔物の群れに近寄って行った。

…無茶な事に、2人で魔物の群れを………いや、1人で魔物の群れを全滅させようとしているのだ。

ヴェーレ（ソード）の眼中にソード（ヴェーレ）は映っていないかった…

ヴェーレは早速ペイルストを取り出すと、それを魔物達に向けて振り回し始めた。

魔物がヴェーレの存在に気付き、攻撃を仕掛けようとヴェーレに近付く。

…ヴェーレはその魔物達をペイルストで薙払っていった。

魔物の断末魔の悲鳴と、体に降りかかる大量の返り血。

ヴェーレは大きな幸福感に浸っていた。

元々、死神は命を大事にして、殺し合いを好んではいけないのだが、ヴェーレはある理由から猟奇的な性格になっていたのだ…

それが為、死に神界を追放された。

ヴェーレはそんな事あまり気にしてないのだが…

…戦いの最中、チラリとソードを見る。ソードはどんな武器で攻撃しているのかと思っていると、ソードはどこからか吹き矢を取り出した。

いくら何でもそれは不利過ぎるだろ…あのパズーカ砲を使えば良いのに…

最初はそう思っていたのだが、ソードの攻撃の仕方を見て、その考えが変わっていった。

吹き矢で遠距離攻撃をしながら…片手に持ったナイフで近距離の魔物を攻撃している!?

ソードは右手に吹き矢を持ち、左手にナイフを持っていた。

近距離の魔物も遠距離の魔物も攻撃出来る。

だが…

魔物の群れを全滅させた後、ヴェーレはソードに近寄り、気になつていた事を告げた。

「なあ…その攻撃の仕方、戦いにくくないのか？」

片手に違う武器を持ちながら戦うなんて、そんな芸当自分には到底出来なさそうだ。

「戦いにくいつて言われちゃあ、戦いにくいけど…何か個性的だし。」

「個性的って…吹き矢の他に武器とか持っていないのか？」

すると、ソードは自分の身長程ある高さのモリを取り出した。

ヴェーレは目を丸くして、モリを見つめる。

「お前…漁師だったのか!？」

「漁師じゃないけど…モリ持つてる漁師もいるよな」

ヴェーレはソードのその発言で、ソード「漁師という勘違いをして、こんな事をソードに聞いた。

「漁師って事は…毎日クラーケンを採っているのか!？」

「…は?どこの国の漁師が毎日クラーケン採ってるんだよ。お前死ねよ。」

…その頃、迷いの森の入り口付近では、もう大抵の生徒達が狩りから帰って来ていた。

アレイヴはソワソワしながら辺りを見回す。

他の生徒達は皆帰って来ているのに、ソードとヴェーレだけは帰って来ていない。

よりによって問題児である、あの2人が…

アレイヴが思考を巡らしていると、急にクラッシュに声をかけられた。

「ねえ……」

「何だ！？俺は今忙し……」

「ヴェーレとソードが道に迷っている……気がする」

「……………」

暗黒学園では、別に生徒を見殺しにしたり、放置したりしても罰せられない。

だが、アレイヴには少し人間くさい所があったので、2人の事が心配になった。

アレイヴは2人を探す為に、迷いの森の奥に消えて行った。

「アレイヴ……次に不幸な目に遭うよ……」

クラッシュの言葉を聞かずに……

…その頃、ソードとヴェーレは、宛もなく迷いの森を歩いていた。

無事にこの森から出る事は出来るのか…

2人がそう思っていると…

「ぎゃあああああ！」

急に近くでつんざくような悲鳴がした。

…何が起こっているのかは分からないが、取りあえず人がいる事は確かなので、2人は悲鳴の聞こえた場所に行ってみる事にした…

悲鳴が聞こえた現場に直行する。

そこで2人が見たものとは…

「お…お前ら…何やってたんだ…」

「そんな状況になっているアレイヴが言うなよ…」

そこには、危険人食植物の口に、頭から下をすっぽり入れられたアレイヴがいた。

アレイヴの頭からは少量の出血が見えた。あの危険人食植物の口に鋭い牙があるからだろうか…

何にせよ、早く助け出さないとアレイヴは間違いなく死ぬだろう。

「迷いの森を歩いていると急にコイツと遭遇して…これは…ドッキリなのか？」

「どう見ても自分から口の中に入って、人食植物と戯れているようにしか見えねーよ。」

何故かと言うと、人食植物は口を開けたまま動いていなかったからだ。

アレイヴは小さな声で2人にこう言った。

「た…助けてくれないか？」

だがソードは…

「そこで死に絶える。」

そう言ってどこかに去って行った。

「前者に同意。」

ヴェーレも、そう言ってどこかに去って行った。

「待て！俺を見捨てるなああああ！」

アレイヴはその後、全治一週間の怪我を負ったとか。

終了・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6476g/>

黒き心は闇を描く

2010年12月18日21時17分発行